

愛媛大學 古典叢刊 15

拾遺和歌集

上
伝二条為忠・世尊寺行忠筆本

愛媛
大学
古典叢刊
15

拾遺和歌集

上
伝二条為忠・世尊寺行忠筆本

第二期 刊行書目 (太字既刊)

- 15 拾遺和歌集 上 伝一条為忠・世尊寺行忠筆本
 16 拾遺和歌集 下 伝一条為忠・世尊寺行忠筆本
 17 大海集 上
 18 大海集 中
 19 大海集 下
 20 景清 丹緑本
 21 源氏物語 冷泉為相他筆鎌倉期古写本
 22 矢野玄道説話集私記 上
 23 矢野玄道説話集私記 下
 大山祇神社 文明万句連歌

他6点

愛媛大学 古典叢刊 15

拾遺和歌集 上 伝一条為忠・世尊寺行忠筆本

昭和四十九年一月一日 発行

編者 山口 堯二

刊行 愛媛大学 法文学部 国語国文学研究室
 愛媛大学 古典叢刊 行会

印刷所 株式会社 関洋紙店印刷所
 松山市文京町三

松山市湊町七丁目七番地一

790 松山市小栗六丁目三ノ二三

発行所 青葉図書

電話 (〇八九九) 四三一・二六五
 振替・徳島 六二二〇

目次 (上下)

頁

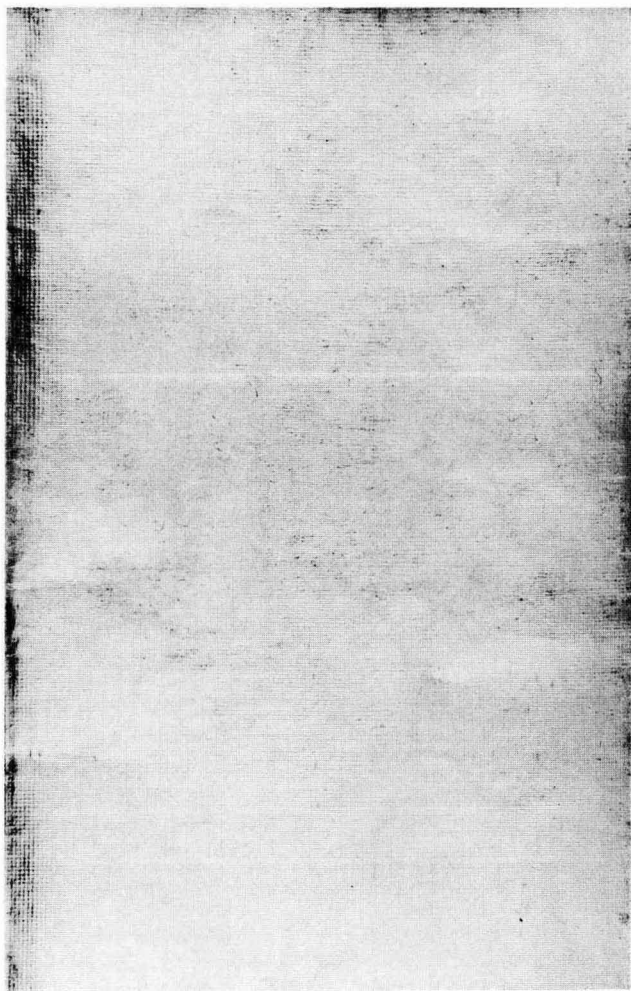
(上)

卷第一	春 (一一七八)	四
卷第二	夏 (七九一三六)	二四
卷第三	秋 (一三七二一四)	三九
卷第四	冬 (二一五二六二)	五八
卷第五	賀 (二六三三〇〇)	七〇
卷第六	別 (三〇一三三三)	八二
卷第七	物名 (三五四四三二)	九八
卷第八	雜上 (四三二五〇八)	一一五
卷第九	雜下 (五〇九一五七五)	一三七
卷第十	神樂哥 (五七六六二〇)	一六六
卷第十一	恋一 (六二一六九七)	一七六
卷第十二	恋二 (六九八七七六)	一九一
卷第十三	恋三 (七七七七八八)	二〇七

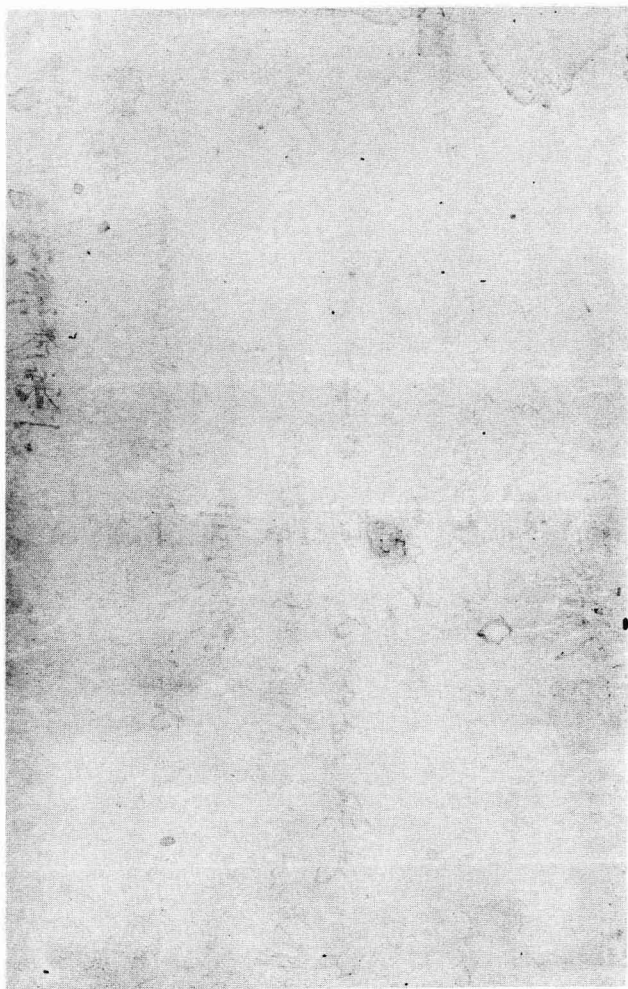
(下)



表紙



見返



1才

昨日、壬午くわ、春霞す。のふもやそ花も
冷泉院東宮。いりもふ内舞。てもち花と
お母さん。空花

源重之

吉野山峯に白雲、此處まで雲霞の立ちこゆる所
此處は時月吹く屏風！

慧性法師

わも^楊の年立帰朝し^て西^へ地^をう^へひ^すの^ふ点

天馬內子

源順

氷ととも春の谷風もたうとけ 響聲

題へ

平祐舉

春立て朝の原の雪もいそぐらんふ羊の心地をす
けしもん家系合

又つ稱

春立て朝の原の雪もいそぐらんふ羊の心地をす

題へ

又つ稱

わやと梅もいそぐらんふ羊の心地をす

天曆十年三月廿九日内裏系合

中納言朝忠

抄本

鳥の聲からせに雪もいそぐらんふ羊の心地をす

うゝひすゝゝえはるゝ

大伴家持

万葉
うはきさるゝ雪はるけきふすゝゝ家のその雪を

題名

柿本人麿

万葉
梅花はるけきふすゝゝ方乃る雪のちんてんはる
逢妻時宣有てそそめはる雪の中

けい

か
むたもゝちんてんてそ白雪の花はるけきふ

同代時屏風

三つ称

か
ちる雪はるけきふ梅花ふそそめはる物ちる雪

吟泉院の屏風の梅の花の家もうとみ

可

平惠威

わが屋。乃梅はきりもやとていふ思ひ外。若。あやせ

厐院屏風

上
福

か
なを先てきしやあんね花あやの霞をうれうれ
そと世のふもえゆるふも希院屏風

其のたのふも元何なる前院屏風

10

日本書紀
 卷之八
 大正十三年
 大正十三年

取

大曆

朝乃原をきく



恒佐右下の家此屏風

つぎ

春をふいにしに人多むしこき春の来し春の来し
わがとに賢くして

田樂院新製

春の来しに人多むしこき春の来し春の来し

顯るす 大伴家持

春の来しに人多むしこき春の来し春の来し
おはきさる宮内といふ人のまゝなるる
をいこるるにやういふ人といふ人

竹ふ五葉うゝひすのまゝこれ
 の日けうこつるふ

松乃うへはく醫のふきそとつねの日はくへ絶
題に
そとね

子曰す所のへに松なりらせむ世のありふりて
入道式ア卿のふにれ子曰しゆ々々命

大長久

少
さ
も
そ
の
ま
に
ち
ね
い
ふ
と
い
ふ
若
い
を
統
て
万
代
や
近
來
ハ
特
口
毎
日
小
水
の
舟
も
梅
花
も
う
前

7
12

梅花もたらぬとて春の水のききつれうきそをん

題一首

梅花

梅花もたらぬとて春の水のききつれうきそをん

梅花もたらぬとて春の水のききつれうきそをん

梅花もたらぬとて春の水のききつれうきそをん

女部卿元良親王

梅花もたらぬとて春の水のききつれうきそをん

梅花

梅花もたらぬとて春の水のききつれうきそをん

女部卿元良親王

三二

三二

三三

三四

三五

白と風とそよと梅花をけりおかしうたふし

るるるる

ともそよ風のかそ青柳のいこ中くろくそ光

屏風

本中長能宣

ちくそそはるるるるるるるるるるるるるるるる

題

元河内躬恒

青柳の花田のふくろあをせてそよぬきく豊

るるるる

花のいむしてそよ青柳の絲のそよふ

るるるるるるるるるるるるるるるる

三六

中家
小室のふと縁のひしめき
山櫻思ふもせぬ花のうへに
歌しす

三七

吉野山より霞乃をまいて人よ
ふれぬ花やゆき
天曆九年丙寅春合

三八

小室のふと縁のひしめき
山櫻思ふもせぬ花のうへに
歌しす

三九

吹風
わきひつれておむすのふり
管家万葉集の中